

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	ドイツ文学翻訳家 中島清
Author(s)	上村, 直己
Citation	九州の日独文化交流人物誌: 119-121
Issue date	2005-02-20
Type	Book
URL	http://hdl.handle.net/2298/13510
Right	

由と独立とを濟はむがため諸国の間を流浪し文筆の上で随分健闘する所あつたに關らず遂に彼は失意の境に終結した。」で始まる、クライスト34才の生涯中愛国的生活の概要を述べたものであった。これを書いた翌年大塚は母校五高の独語講師となり、大正4年3月に教授に任命された。五高時代は独語の教授以外に「第五高等学校仏教青年会」のためにも貢献した。

だが、大塚は大正7年12月5日に急逝した。死因は高木の『国文学五十年』によるとチブスであった。同じ頃数学の立山林平も亡くなっており、五高は同時に二人の教授を失った。校友会雑誌『龍南会雑誌』第168号（大正7年12月）に「師の訃」と題する弔辞が掲載された。大塚の葬儀は12月6日、五高にほど近い熊本市坪井の浄行寺で執り行われた。

「フィルターゲ。これ嘗つて大塚先生の生等に教へられし独文小説なりき。何ぞその御声の玲瓏として我が心に響き来るの尽きざる、師の柔和なる御容今に心を離れず。あゝ十二月六日、雨悲し香煙縷々として絶えざる浄行寺内、読経の声に涙袖を絞る者場に満つ。午後七時十分上熊本駅に謹んで先生の遺骨を送り奉る。悲しき汽笛。悲しき汽車の北に消えゆく影。あゝ、凄寥なるかな龍南。我れ龍南に來りて味ふ悲痛、今益々深み來にけりな。慈雨激しく降る。…」

『龍南会雑誌』第168号（大正7年12月）には高木市之助が「大塚君とむらひの日に」と題して短歌8首を寄稿している。3首を引く。「そのいのち『死ぬる死ぬる』とさげびたるたゝかひのあとのけふのしづけさ」「癒に果てばざりしや語やらうとつぶやきていく日もあらぬに、なにのざりしや語」「なにうらむとは無けれども人の死のいきどほろしくたへられぬかも」。

ドイツ文学翻訳家 中島 清

大正から昭和にかけての独文学者や独文学翻訳家の多くは東大をはじめとする官学の大学の独文科出身者で占められていた。しかも彼等の殆どは旧制高校などの教師であった。だが、私学等でドイツ語を学び、長く民間あって、優れた業績を残した人も僅かながらいた。そうした一人に佐賀県生まれの中島清がいる。

中島清は履歴書（文部科学省蔵）によると、1883年（明治16）10月6日、佐賀市多布施町216番地（当時・佐賀県佐賀郡神野村字多布施）に生まれた。なお、この履歴書は中島が晩年、昭和25年に北大講師に採用された際に中島本人によって作成され、それ以後の事項は北大事務職員によって記述されたと推定されるものである。さて中島は履歴書によると、佐賀尋常中学校に学んだが、明治29年3月同校を中退し、同32年9月、熊本陸軍地方幼年学校に第3期生として入学した。彼はここで初めてドイツ語を学んだと推定される。だがここも2年後には退学した。従って『熊本陸軍地方幼年学校一覽』（大正2年）の巻末の卒業生名簿には彼の名はない。その後、明治36年5月今度は東京の早稲田専門学校文学教育科に校外生として入学、2年後通信試験によりそこを卒業した。そして明治42年4月、本格的にドイツ語を学ぶために神田にあった私立の独逸語専修学校に入学した。同校は独逸学協会学校の附属学校で、ここに学んで名を成した人は多い。詩人で独逸文学の訳書もある生田春月がそうであり、魯迅もここでドイツ語を修めた。さて中島清はそこで2年間学び明治44年3月に卒業。更にドイツ語に磨きを

かけるためであろうか、大正元年9月より同2年8月まで東京小石川のドイツ学院においてドイツ人からドイツ古典文学を学んだ。その努力の甲斐あってか、履歴書に「大正初年以後外国文学（主としてドイツ文学）の翻訳及び著述を以て業とす」とあるように、次第にドイツ文学の翻訳活動が活発になっていくのである。彼が訳した作家はゲーテ、クライスト、グリルパルツァー、ヘッベル、R・ワーグナー、G・ハウプトマン、シュニツラーなど広範にわたる。更に独文学の翻訳だけでは飯が食えないと思ったのか、ロシア文学からもアルツイバーシェフの『サーニン』なども訳している（初版、大正8年）。

翻訳だけでなく『ゲーテの生涯』（昭和8年）などの著述もあるが、訳書に添えられた解説や作家の小伝を見ても、彼は単なる翻訳屋でなかったことが分かる。だが彼は訳筆を折って、昭和9年8月、ブラジルに渡航した。独文学の翻訳だけでは生活維持が困難になったせいではないか。当時は大学出の若いゲルマニストが続々現れ、しかも彼らは大抵翻訳の仕事もしていたので、中島のもとに翻訳の依頼は以前のように来なくなっていた状況が考えられる。それで新しい仕事を求めてのブラジル行きだったのではあるまいか。履歴書に曰く「昭和9年8月、ブラジルに渡航、同国レヂストロ植民地に於て農事見習をなす／同10年5月、以降サン・パウロ市に於て邦人子弟ノ部の教育指導を担当す／同12年7月、以降同14年1月まで、サン・パウロ市に於ける教育普及会の嘱託として雑誌『黎明』の編輯を指導す」、更に曰く「昭和14年3月、ドイツに赴き、日独文化交流の實際を視察研究す／同年9月、英独戦の開始と共に独逸を去り、イタリー、英国、米国を経て12月帰朝す／昭和15年9月、大連に渡り〈翌年〉5月末、東京に帰へる」（く）内は筆者が補ったもの）。

こうした放浪の後、中島は戦後1950年（昭和25）4月、北海道大学法文学部（旧制）講師に採用された。同年9月には北海道大学文学部（新制）に配置換になった。当時の状況を知る山崎義彦の「幻のゲルマニスト」（『ラテルネ』29号、1973）という文章によると、60も半ばを過ぎた小柄な老人の中島は、一粒種と思われる妙齢の婦人に伴われてどこからか幻のように函館に現れたという。そして北大文学部講師として水産学部でドイツ語を講じ始めた。山崎は証言する。

「学生たちが驚いた。幾らドイツ語教師払底かどうか知らないが、こんなじいさんを教壇に迎えねばならぬとは？と。（北大の定年は六十三歳である。）しかし、老人がテキストのファウストを朗々と読み、彼らには深遠な謎とも見えるその難解な詩行をば快刀乱魔を断つの冴えをもって講釈するを聞くに及んで二度びっくり、思わず居住まいを正した。だが、如何せん、文科の学生でもない彼らには老人折角の名講義も遂には豚に真珠、猫に小判であった。だから老人の何たるかに思いを凝らす学生などほとんど一人もなく、そしてこれは同僚の教官連とて同断で、中には、どこの馬かも分らぬ安月給の老いばれ講師と言わんばかりに老人を見る者もあった。もちろん、老人のどこやら上品な細面の横顔に何がなし過去の栄光を感じた同僚も居らぬではなかったが、老人はさなきだに社交ぎらいな上に自己を語ることに余りにも少なかったので、やがては年寄りにしては精励恪勤の殊勝な教師というだけの存在になってしまった。」（「幻のゲルマニスト」）

北大では4年間教えた後、昭和29年4月15日付で辞職した。時に71歳であった。その際退職金34,080円が、更に半年後には一時恩給金109,200円がそれぞれ支給されていることが履歴書か

ら分かる。

退職後ほどなく、中島は送別の宴も見送りも固持して、また愛嬢に伴われて函館をいづくへともなく去ったという。そして1966年（昭和41）12月19日、神奈川県藤沢市で世を去った。享年83。

今日、ドイツ語関係者の間でも中島清の名を知る人は殆どいない。その業績にも拘わらず彼の名が伝わらなかったのは彼が大学出でなかったことが大きい。だがはっきりしているのは、もし我が国の独逸文学研究史が編まれるとしたら中島清は決して無視できないということだ。

シラー作『鬻群盗』訳者 堀田正次

堀田正次は履歴書（文部科学省蔵）によると、1876年（明治9）2月28日に生まれた。本籍は宮城県であるが、先祖は江戸旗本の武士であったという。仙台市の高等小学校を卒業後、私立東華学校を経て私立東北学院に入学した。堀田はこの東北学院において英語のほかにドイツ語を初めて学んだ。当時の独語教師は旧東京外語出身の山口造酒であった。さて、そこを出ると堀田は1899年（明治32）9月、東京外国語学校独逸語科に入学した。当時の独語科の教授陣には山口小太郎、水野繁太郎、尺秀三郎の各教授、田代光雄助教授、外国人教師のエミール・マチーゼン、エミール・ハリールがいた。これらの優秀な教師たちの薫陶により3年間の在学中に堀田の独語力は大いに伸びた。明治32年12月15日発行『独逸語学雑誌』によると、同年10月23日に高等商業学校の講堂で開催された「第2回ドイツ語談話会」（これは現在の日本独文学会の濫觴ともいべきもの）において堀田は早くもチロルの自由闘士アンドレアス・ホーファーについての朗読を行っている。従って堀田は外語入学以前にかなりの語学力を既に身につけていたと推定される。そして明治36年7月、東京外語独語科を優秀な成績で卒業した。卒業式では卒業生代表して謝辞を述べた。当時外語学校ではこれは通常専攻語で行われたのであるが、『東京外国語学校一覽』（自明治35年至同36年）にはその日本語訳が収められている。堀田は謝辞の中でシラーの有名な長篇詩「鐘の歌」から次の一節を引用している。「男児出では、戦闘の世に入らざるべからず、事を挙げ／力を尽し、播種し、営作し／機智を用ひ、勇気を鼓し、敢て賭し／敢て試み、以て幸福を、獲ざるべからず」。そして我々卒業生はまさに今この詩の通りの立場にいるとして、次のように述べている。



諸先生ハ茲ニ生等ヲ其指南輔導ノ下ヨリ放チテ孤立独歩ノ便ナキ身トナラシム誠ニ将来幾多困難ナル重任ハ生等ノ覚束ナキ独立ヲ危ウセントスルモノアラン然レトモ生等ハ尚安シテ人生ノ戦闘ニ従事シ得ヘシ何トナレバ、生等ガ今去ラントスル此学校ハ生等ヲ装フニ比類ナキ特殊ノ武器を以テシタレバナリ夫レ言語ハ人類ヲ禽獸ヨリ分ツ所以ノモノニシテ此物ヤ